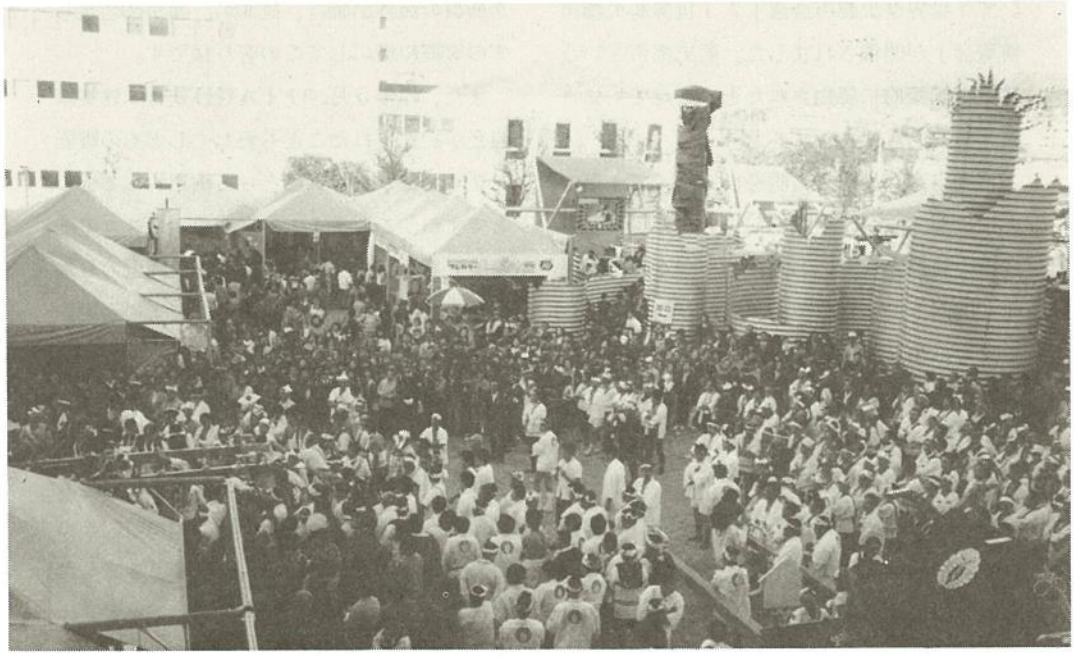
№ 27　　1988年1月1日

ARPA・K NEWS LETTER 地域計画・建築研究所

恭賀新春

昭和63年元旦



「伝統と創生」をテーマとする世界歴史都市博覧会が京都府総合見本市会館（パルスプラザ）で開かれました。（87年11月）

アルパック　ニュースレター　もくじ

・あけましておめでとうございます …… 2
・ネットワーク時代にむけて－人間から物産まで－ …… 5
・不自然と自然の間 …… 7
・一泊宴会型観光とまちづくり …… 8
・アルパック連続セミナー・矢野治氏講演会から …… 10
・旧刊新刊書評「岐路に立つ都市再開発」 …… 12
・きんきょう　○カヌーに凝っています …… 13
　○旧況ですが、水需要調査15年目の問合せ …… 13
　○やはり古墳は空から見るものだ …… 13
・自慢のみやげ物、うまいもの通信①「湯原独楽」 …… 14
・ネットワーク通信①「ため池の会」 …… 15
・まちかど …… 16

NO. 27

あけましておめでとうございます　　今年もよろしくお願い致します

渦巻くマグマの上で、急旋回する船に乗っているはずですが、おかげさまで、静かな日本のお正月を迎えさせて頂いております。本年も宜しく、お願い申し上げます。

代表取締役社長　**三輪　泰司**

歴史都市と文化首都圏構想　昨年、京都において「世界歴史都市会議」と「世界歴史都市博覧会」が開催されました。歴史都市という言葉が国際的に認知されたという点でもまさに“歴史的”でありました。

自動車が今世紀の文明をひっぱってきたことは確かですが、それを前提とした現代都市建設の論理が将来にわたってつづくのか、保全と開発といった問題を、延々と悩んできた歴史都市からの率直な提起でした。

東京への一極集中が賑やかに論議されています。調べてみますと、東京湾を巡る開発構想は、実に50余にのぼります。ところがその論理のひとつである業務床需要の根拠がもひとつよく判りません。また、故意か偶然か、その構想には防災や地盤状況のことは触れられていません。奇妙なことであります。

本年は、京都では２巡目の国体、奈良のシルクロード博に明年の大阪の花と緑の博覧会と、関西も賑やかなことです。イベントも賑やかですが、遷都論・分都論・展都論も盛んになっています。

わたくしどもとしましては、関西文化学術研究都市構想の“仕掛け”に取り掛かって11年、世界の中の日本が21世紀へ向けて何をもって貢献すべきか、日本文化発祥の地・関西の役割は何か、将来の都市は如何にあるべきか、“提言”で打ち上げた理念は、文化首都圏構想として発展されてまいりましたが、これからの都市文化と都市文明のパラダイムの構築に、なお一層勉強しなければ、と巡りきた新年にあたり、思いを新たにしている次第です。

アイデンティティと国際化　昨年、アルパック所員の海外出張は、延30名。僅か60名足らずの零細組織にしてこの有り様です。

また、昨年５月、ＪＩＡ(社)新日本建築家協会が設立されたこともわたくしどもの職能ープロフェッションにとって画期的なできごとですが、このＪＩＡは国連のユネスコの一機関でありますＵＩＡ世界建築家連盟の日本支部でもあることも、注目されてよいと思います。

なりゆきで創立時の理事の末席に連なったおかげで、歴史都市会議に先立って開かれた、国際専門家会議に丹下健三会長の代理として参加する機会を得、各国からの旧知の、また初めての先生方とお会いし、議論できました。

国際化とは、結局、自分自身のアイデンティティをしっかりと持つことであること、世界でいま、すざましい勢いですすんでいる情報の公共化と、デモクラシーの新しい潮流の中で、建設的な「参加」を実現する専門家の役割・資質が決定的ともいえるということで意見が一致しました。

若い所員たちは、国内・海外を自由に動きまわり、見る・学ぶの段階から進んで、実践的な成果を摑みだしてきています。実行力とマナー、これがこれからのシンクタンク、プロジェクト・コンサルタント、デザイナーの資質であろうと思います。今年“国際都市東京”も含め、新たな展開を考えております。

“実行のアルパック”とその新世代へご支援ご鞭撻のほど、宜しくお願い申しあげます。

（みわひろし　代表取締役社長）

あけましておめでとうございます　今年もよろしくお願い致します

―〈糸乗　貞喜〉―

リゾート流行りです。今年はどうなるでしょうか。ログハウスのことについて誰かが書いていました。「ログハウスの本が流行の時代があった。今はログハウスの建て方の勉強の時代になりつつある。この次にログハウスが流行の時代が来るのではないか……」。この伝でいけば、昨年はリゾート計画の流行の年だった。今年は計画でなくリゾートそのものが流行の年になるのか、あるいはもっと先のことなのか。私は今年、実需型のリゾートを考えてみたいと思っています。

―〈霜田　稔〉―

国際化、情報化、高齢化、産・官・学連携、リゾートづくり、そして地域活性化は、まさに実行の段階となりました。この実行のためには、人づくり、組織づくり、事業システムづくりと多面的な能力の動員を必要としています。今年は、このための対応力を国内外の友人等の協力を得て早期に確立して、みなさまの御要望に備えていきたいと思います。

このためにも、昨年のアルパック創立20周年を記念してのセミナーを、今年も引き続き継続していきたいと考えています。

―〈道家駿太郎〉―

京都へ来てほゞ19年、付合いが増えるにつれ、増る京都の人材の豊富さ、人の魅力、もの造りの技術の高さ、そして含み資産の大きさに、ただただ驚くばかりです。

建都1200年まで僅か６年、21世紀へのステップとして底力を表に示すことがそろそろ必要な時期と思われます。本年も触媒としての活動を進めたいと思っています。

―〈金井　萬造〉―

昨年は、自分自身の国際化として、公私にわたり海外の見聞を広めさせていただいた一年でした。ウォーターフロント、リゾート、中国（東北）貿易、コンベンション・新都心づくりと多くの事例に接する機会を得ました。

また、まちづくりとして役に立ち、事業のフィージビリティーのあるまちづくりに具体的に取組んできました。皆様方に何かと御迷をおかけしながら、一生懸命走り、自分のストックを強めた一年でした。

新年にあたり、これらの蓄積をさらに発展させ、焦点をいくつかにしぼって、より一歩前に進めたいと念願しています。特に中長期的テーマを持続的に追求していきたいと思っています。大阪事務所も４月に数人を迎え、現有勢力のポテンシャルも高め、内に組織を固め、強めて、社会に役立つコンサルタントを目指したいとはりきっています。

―〈倉本　恒一〉―

昨年事務所にワープロが目出って増えた。個人持ちを含めると２人に１台か、ＡＶ機器やＣＡＤ機器も入り、事務所の環境も変わりつつあります。新たな動向に対応する施設づくりは情報が勝負です。新たな知識の獲得に奔走する一方、信頼を裏らぎらず、やりとげる技術的蓄積が、増々重くのしかかってきます。事務所の環境改善と共に心の環境改善をせねばと、あせりを覚えつつ過すこのごろです。

―〈尾関　利勝〉―

昨年は何かと名古屋が話題になった年でした。その一つ星野ドラゴンズはいよいよ龍年で今年は本格的に皆様を楽しませてくれると思います。ところでＡＲＰ・Ｋ名古屋も皆様のおかげで名古屋で５年間何とか頑張って、ようやく皆様に少し認めていただけるように成って参りました。この５年間、地方の立場とグローバルな視野を持ちつつ、地域のプランニングに携わるシンク＆ドゥータイプのコンサルタントを目指して努力してきた積もりと自画自賛していますが、皆様にはまだまだお叱

りを頂載することが多々あろうかと存じます。

87年はＡＲＰＡ・Ｋ名古屋の変身元年としてスタッフも増員し、新たな時代と地域に挑戦する元気集団として、地域の様々な皆様とともに全国に世界に発信する飛躍の年にしたいと願っています。今年も旧来に増して、暖かくお付き合いいただけますようお願いします。

―〈重本　幸彦〉―

"関西文化首都"論には賛成だが、今ひとつ、はやっていない。関西の人々には、自ら「首都」などと名乗ることが、おこがましく、しっくりこないのではないか。文明は技術の体系、文化は価値観の体系とすれば、声高に文化首都と言わないところが、文化の首都の地の所以かもしれない。

―〈山口　繁雄〉―

成熟化社会を迎えつつあるということで、このところ私共のところでもアメニティやリゾート等に関わる仕事に携わらせていただくことが多くなりました。従来から中心的にやっている市街地整備や地域振興等の分野においても、ますますユニークでフィージブルな施策が求められつつあります。みんなでいっそう勉学に励み、皆様の御期待に添えるよう頑張りたいと決意を新たにしています。

―〈杉原　五郎〉―

20世紀も残りわずかとなり、21世紀が手の届くところまできました。"時代の節目"を迎え、新しい時代を展望しリードしうるコンサルタントへの期待が高まっています。交通計画グループは、沿岸域問題へのアプローチを軸に、交通・港湾・都市及び地域の各計画分野における計画力の向上に努めたいと思います。また、環境計画グループは、廃棄物問題への取り組みを中心としながら、都市及び地域における環境問題を総合的に調査・分析・計画しうる力量を蓄積していきたいと考えています。

―〈斎藤　侑男〉―

昨年は、弁護士の方から、再開発事業にあたっての要締――現場での実践的悩みと、全国の経験を把みとることの大切さと、何よりも都市づくりにあたっての「ロマン」を教えてもらいました。民間のコンサル事務所として、現場で悩むことの多い日々の中で、先達の到達点を少しでも多く勉強していきたいと、思いを新たにしております。

―〈北条　　誠〉―

1987年6月15日ＪＩＡ（社団法人新日本建築家協会）が発足しました。このＪＩＡは『建築家の職能確立と、来るべき時代の建築家像を求めて』設立されました。そして、建築家とは『人間の健康と安全に大きな社会的責任を担うものである』とうたわれています。建築家ーアーキテクトとは、ギリシャ語のアルキテクトンー大技術家が語源と言われています。私達は、単なる技術をみる眼だけでなく、歴史を洞察する眼、現実の社会をみる眼、そして将来を展望する眼をもつことが、技術屋から大技術家ーアーキテクトになる条件ではないかと考えています。ＪＩＡ会員になったことを期に、この４つの眼をはぐくむべく、都市と建築の創造に向けて、より一層の努力をしていきたいと考えています。

―〈九州地域計画研究所所員一同〉―

昨年11月に、交通利便な天神１丁目に事務所を移転しました。これからも、より多くの人にお越しいただけるような、また地域の情報発信源の一端を担えるような事務所となるように所員全員努力してゆく所存です。

ネットワーク時代に向けて

―人間から物産まで―

伊集院豊磨・山田　龍雄

この度、九州地域計画研究所（アルパック九州事務所）は、人が集まりやすい事務所に衣がえするために、福岡市の中心部の天神に移転し、スペースを広げて会議室を設けました。それを契機に当事務所で地域ゼミナールと各地の特産品をそろえた事務所披露パーティーをいたしました。

当日は、これまで10年間の仕事でお世話になった方、地域ゼミの講師の方、これからお世話になる方や大学の恩師、ＳＡＳの会の方々等、約30名の方に参加していただきました。

地域ゼミナール（米谷冨男氏講演会）

当日、大阪からこられた米谷冨男氏には、ご多忙のところを**「地域おこしのネットワーク創り」**をテーマにして、日頃ご自身が直接タッチして実践しておられる地域おこしの話をしていただきました。講演の内容を要約してキーワードを紹介します。

〈変化の時代に求められること〉

• 文明構築から文化創造へ、擬態化ー新しいイノベーション、私本主義化（自分自身を生かすこと）が大切であり、インフラ整備からその場（舞台）での活動づくりが大事な時代に入っている。これが文化の時代。

〈文化の時代に求められる人物像〉

• 何か卓越したことがある人（私は生花も長くやっている）

• Something Interestingをやっている人

• 個性のある人（いいセンサーを持っている人）、

〈人がワクワクするための条件〉

• おもろいこと、役に立つこと、得をすること。（マーケッティングが特に大事である）

〈これからの活動のあり方〉

• Human Active Netwark（HAN）の形成、（これが創造性を生みだす源）。

• 小集団の活性化（異った情報を持つ人の集まり、つまり異情種交流が大事）。

• 個人があって帰属組織があるとの認識、（横型組織をつくること、自己アイデンティティ……例えば米谷さんはマンガ入りの名刺を持っている）

• やっていけないこと。常識と権威にたよらない。不可能を証明しない。手続過剰にならない。

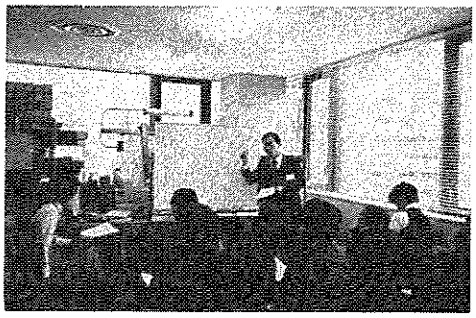
最後に、「①夢を見て、考え行い、神に祈る。」「②人事を尽くして天命を待たず、あとは野となれ、山となれ。」の言葉で講演をしめくくられました。

参加した方自身が日頃から人と人とのつながりを大事にされている方々であり、後日、参加者の方から別表のようなご意見と感想をいただきました。

参加者のご意見・感想

・米谷さんの精力的な活動量にびっくりした。
・キソウテンガイな話で、実際にモノを作っていることがすごい。
・参加している人達が面白人間で、その人達と話ができたことがよかった。
・話の切り口と表現（ex擬態化、私本主義）がユニークであり、共感することが多かった。
・はげまされている気がした。
・若い世代を代表する人達のパーティーの雰囲気が特に印象深い。
・もう忘れた。気が若い人が大勢来てた。
・… あのあゆのつくだ煮はうまかった。
・時間が短かかった。特に米谷さんの話は具体例をひとつひとつ詳しく聞きたい。

地域ゼミナール



特産品による事務所披露パーティー

事務所移転の準備期間中より、事務所の披露パーティーは形式が決まったホテルなどで行うより、もっと楽しく感じられるものができないかと考えておりましたところ、今年、筑豊の山田市より産炭地活性化事業による特産品開発の仕事を受けたため、特産品なるものの研究も兼ね、特産品による披露パーティを企画しました。

事務所を移転した11月１日には、丁度、事務所の真前にある旧県庁跡地で九州各県の特産品を集めた「九州大バザール」という催し物が行われていたため、ここで一応九州一円の特産品を集め、さらに次の週には北九州市小倉で行われた「県農林水産まつり」で福岡県内の品物を揃えましたが、どうしても日持ちするものということで少々漬物に偏ってしまいました。そこで特産品のいろいろな本から漬物以外の少し珍しいものを京都、大阪、名古屋の各事務所などから宅配便で送ってもらいました。

出席者の中には、このような手づくりのパーティーが珍しかったためか、アイデアに感心される方、特産品の中味を詳しく知りたがる方など、この特産品を「肴」に話が弾みました。中には、このような会を毎月やったらどうかと提案される方もおり、準備した者としては返事に困った次第ですが、皆なそれぞれ地方に出かけた時に買ってきた物を持ち寄れば、簡単にできるものと思いますので、また企画したいと考えております。

ちなみに、特産品の中で好評だったものとしては、南部川村の梅干し、香住町のカニみそ、矢部町のヤマメのイクラ、古座川町のあまごの燻製、多久市の愛ベリーいちごなどが挙げられます。

（いじゅういんとよまろ・やまだたつお）

特　産　品　メ　ニ　ュ　ー

福岡県	むつごろうのかばやき（柳川市）　ハヤの甘露煮（矢部村）　ミョウガの甘露漬け（北九州市）
佐賀県	スモークチキン（大和町）　手作りロースハム（西有田町）　手作り焼豚（西有田町）　干しわらすぼ、あげまき（川副町）　あじのひもの（唐津市）　しそ巻梅干し（多久市）　愛ベリーいちご(多久市)
長崎県	くきわかめ（美津町）　とうふかまぼこ（島原市）　ゆずジャム（壱岐郷ノ浦町）
熊本県	ヤマメの玉子塩づけ（矢部町）　いのししのみそ漬（泉村）　平家漬（泉村）　なすのからし漬（湯前町）
大分県	梅ジャム、スモモジャム（大山町）　チョロギ漬（中津江町）　ショウガもろみ漬、梅もろみ漬（玖珠町）　花きゅうり（耶馬溪町）
沖縄県	スクガラスの塩から（沖縄市）
その他	梅干し（和歌山県南部川村）　鮎の昆布巻　あまごのくんせい（和歌山県古座川町）　名古屋コーチンの照焼（名戸屋市）　きじのくんせい（山口県周東町）　にしん、鮭、ほたてのくんせい（北海道）　山ブキのつくだ漬（島根県広瀬町）　焼かれい、干しだこ、カニの粕漬、カニみそ（兵庫県香住町）
お　酒	清　酒　月桂冠 生酒、大和の原酒、他 焼　酎　伊佐美、アサヒ、伊佐大泉、他 ワイン　小樽ワイン、余市ワイン

注）なお、ご賞味していただき、販売先をお知りになりたい方は、九州事務所（山田）までご連絡下さい。

不自然と自然の間

― 下松栽培漁業センター見学から ―

糸乗　貞喜

海の魚の養殖は陸で行なわれているにもかかわらず、厳密に海の自然条件にしばられている。これが下松栽培漁業センター見学の結論であった。

ここで養殖されたヒラメを旅館で頂いたが、大変美味であった。

贅沢なようだが、はまちの刺身を苦手としている。もともと魚は好物ではあるが、はまちの刺身の、ふわ、とした、しまりのないやわらかさと脂っこさが受けつけにくくなったのである。そのため、養殖というと、なんとなく避けたいような気分になっていたが、ホタテ貝などは養殖であっても、それを感じたことはなかった。栽培したものかどうかで好き嫌いがあるわけではないことを、ついつい忘れてしまっているわけである。

考えてみると、この1年の間に栽培でない農産物、あるいは自然栽培は農業といわないわけではあるから、陸上生物というべきかもしれないが、そのようなものは、ほんのちょっぴり口に入ったマッタケぐらいかもしれない。どうしても思い出すことはできない。

栽培漁業センターでの養殖は、陸上水槽と海中生簀で行なわれているが、陸上水槽が大きい役割をはたしている。ところがここでの養殖はそう勝手にはできない。魚は海水中で飼を食べて成長する。この海水環境の水温がポイントとなる。

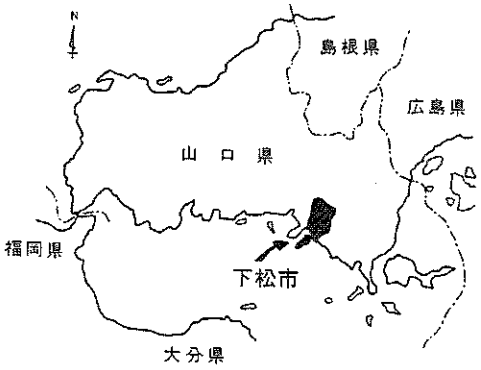
ヒラメの場合は低温に強い（5℃でも死なない）が高温に弱い（27℃以上になると死ぬことがある）。そうなると、陸上水槽の水は常時海中から補給しつづけなければならないので、海水温度にしばられてしまう。もちろん養殖水槽の水温を温めることも冷やすことも可能であるし、浄化することもできる。しかしその為には暖冷房費用がかかり、コスト面から話にならない。

結局、海の状況に左右されるわけで、「自然」条件が「人工」養殖のカギをにぎっている。変な感じがするが、自然条件にしばられた工場であった。

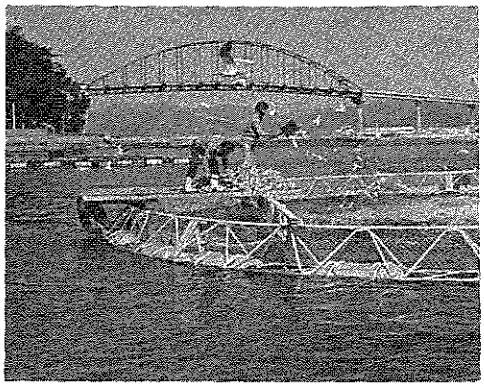
この話を聞き、センターを見回りながら農業のことを感じていた。

この下松栽培漁センターの中心事業のひとつは中間育成した上での「放流」であるが、これは育苗をした上での植林に似ている。中

下松市の位置



海上のイカダ養殖



間育成されたものでなく卵とか孵化後すぐのものでは、他の生物のエサにされてしまうということであったが、山林に種をまいただけでは他の植物に負けてしまう事情と似ている。

また養殖も、一般の農業栽培や畜産と似ている。極端な畜舎管理によるものや、ハウス栽培の野菜の味のなさと、ハマチの味とが似ているように思う。海の中でハウスをつくることもできないだろうし、それほどの不自然はゆるされないという海の方が、条件はきびしいと感じた。　（いとのりさだよし）

一泊宴会型観光とまちづくり

― 日光・鬼怒川温泉と江戸村 ―

藤田　武彦

10月の下旬、温泉地のまちづくりを考えるため、日光鬼怒川温泉を訪ねる機会がありました。鬼怒川温泉は、東京・浅草から東武鉄道で約２時間半、栃木県の西部にあり、江戸村は温泉に隣接しています。ここでは、その時の印象と、近年鬼怒川にオープンした「日光江戸村」について紹介いたします。

日光江戸村探訪

日光江戸村については、テレビ等でも宣伝されているのでご存知の方もいらっしゃるかと思います。内容としては、江戸の下町などの風景を再現し、中にたべもの屋（素朴な田舎料理）、みやげもの屋、見世物小屋などが並び、通りで時代劇ショーが行われていといった具合です。関西では京都の東映太秦映画村が類似のものといえますが、それよりはむしろたべもの屋、みやげ屋に重点が置かれた施設と考えることができると思います。

この施設は昭和61年４月にオープンし、現在年間160万人の入込をみています。事業を行ったのは大新東株式会社で、もともと日光市内での開設を予定されていたそうですが、結局鬼怒川温泉の近くに立地したものです。敷地は、山林部分も入れて約15*ha*、もとは鉱山であったところを廃山にともなってその活用が図られたということです。

料金は大人1,500円を入村時に払って、あと中で各見世物などに個別に料金を支払いま

江戸村の通り風景

江戸村のたべもの屋

す。食べて、見て、買ってやはり3,000～5,000円程度使うかもしれません。しかし2時間程度は十分楽しめます。ここの最大の売り物は「東宝」と組んで行っている時代劇ショです。忍者、花魁、チャンバラなど盛りだくさんです。現在2期工事も進められ、今度は江戸の武家屋敷を再現されるとのことです。

お客さんのほとんどは鬼怒川温泉の宿泊客で、いわば鬼怒川温泉観光のオプショナルツアーといえるかもしれません。

中に入っているたべもの屋、みやげもの屋などはテナントで約30軒入っています。そのため全従業員は約300人程度で、うち地元（藤原町）から約1割程度の従業員供給となっています。実際行ってみての実感として、なぜこんなに入込客があるのか不思議な気持ちでしたが、それは関西の人間の思いであってすぐに理由はわかりました。

鬼怒川のまちづくりと観光

江戸村探訪のあと、地元の藤原町を訪ね、鬼怒川の観光の話をききました。

「鬼怒川温泉は日光の門前町で年間約280万人の宿泊があります。近くの川治温泉と合わせて300万人宿泊しています。東京圏というのは約3,000万人以上の人口をかかえ、その1割とっている勘定です。お客さんは東京60%、その他関東25%、他府県15%ぐらいです。藤原町は人口約13,000人程度ですが、温泉旅館は約55軒あって、温泉客相手のサービス業などで町内就業の約75%がかかわっているでしょう」担当の課長さんは淡々とお話されました。さらに、「鬼怒川は、一泊宴会型の性格をもつ観光地です。」この表現も印象的でした。そういえば、昨日泊まったホテルでも宴会場に通され、会場のそこここで個別に盛り上がっていたなあと思い出しました。また土曜日だったのでまかないをされている女の人も忙しそうなようすで、お酒をもってくる以外こられなかったなあとか、考えながら聞いていました。

鬼怒川温泉の旅館街

そうしてみると江戸村の160万人という数字も不思議ではなく、かえってあたりまえに見えてくるようになり、また、関西は多分この1/3程度の力しかないのではないかとも思いました。でも関西の客はこういった一泊宴会型だけでは満足しないだろうなあと妙と「関西イズム」が頭をもたげます。

さらに、昨夜、夜の街に出てみた時の印象が思い出されます。それは、外を歩いていて店（みやげ屋など）があまりに少ないことです。多分おみやげ屋は10軒もなかったのではないでしょうか。またストリップ小屋も2軒しかなく（言うまでもなく見物しましたが）、にぎわいがほとんどありません。これはホテルが全てのサービスを抱きかかえているからだという説明でした。

そして、担当の課長さんが最後にいわれたことは、「ホテルだけよくなったが、今までの温泉街のよさがなくなって、まちになってないのでかえってさびれた気がする。」ということでした。結局江戸村も含めて、話は「まち」づくりの重要性ということに帰着します。我々にとってもいい教訓となった次第です。　（ふじたたけひこ）

アルパック連続セミナー

「都市再開発への視点」

― 街づくりとしての「つかしん」―

矢野　治氏講演会から

去る10月３日にアルパック連続セミナーの第４回を開催しました。当日は、㈱西洋環境開発取締役　矢野　治氏に講師をお願いし、開店以後２年経過した「つかしん」について、「つかしん」内のチャーチスクウェアでお話しをしていただきました。会場には約100名の方が参加され、遠くは岡山県内からもおいでいただき、盛況のうちに会が進められました。ここにそのセミナーの要旨をご報告させていただきます。

「つかしん」計画の経過

既にご存知の方も多いと思いますが、「つかしん」の概要を簡単に述べます。

「つかしん」は元グンゼの工場跡地につくられたもので、敷地面積59,400㎡、延述面積118,600㎡、駐車台数1,000台の規模です。店舗は西武百貨店と専門店264店が入り、その他にグンゼスポーツ、ホール、チャーチなどを設けています。総工費は内装費等は除いて約200億円となってます。

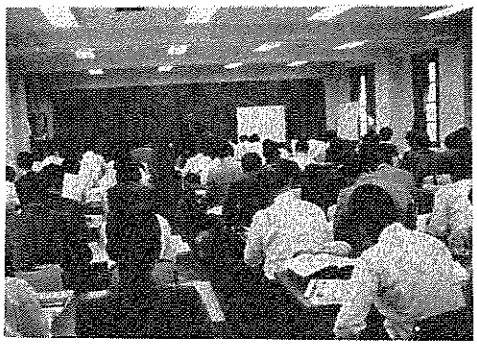
計画段階での商圏の設定は、車時間距離30分圏（25分限界）内を対象としています。人口としては190万人程度で、尼崎、伊丹などの阪神地域が含まれます。商圏内の競合地としては梅田・三ノ宮といった大商業集積があり、これらにはないものをつくるという当初からの課題がありました。しかし一方で、この阪神間は成熟した住宅エリアであり、階層としても多様で「モザイク模様のマーケット」となっているため、いろんな商売が可能であると考えていました。

見込としては大型ショッピングセンター（S.C）がいけると考えていました。そこで昭和48年から計画づくりに入り、商調協、環境アセスメント等を経て、昭和60年９月にオープンしました。しかし開発に関連して出てきた問題は、道路問題、商業調整などはじめてづくりのものが多くありました。

「つかしん」のコンセプト

「つかしん」は48年以後計画されたので、石油ショック等の世の中の大きな変化を経て建設されたものです。その間に、昭和57年にはこれまでのS.Cの考え方を問直し、計画の白紙見直しが行われました。その際ヒントになったのは、「買い物のわずらわしさをなくす」コンビニエンスストアの盛況と「非日常性を演出している」ディズニーランドの考え方でした。そのため、「つかしん」は、ワンストップショッピングだけでなくコンビニとは対極にある「楽しさ」を持ち込もうと考え、また店づくりでなく「まちづくり」として進めてみようと考えるようになりました。この考え方を一言でいうと、「ヒューマンスケールのまちづくり」「人間主役のまちづくり」ということですが、これまで実行されていな

講演会の風景



かったものです。

「つかしん」のコンセプトとして「生活遊園地」「ハッとしてホッとするまち」といった表現を使っています。これは、最近の若い人の意識をうけて考えたもので、「つかしんに遊びにきて下さい。ついでに物も買って下さい」ということです。またこれまでのS.Cと同じでは、ここの敷地は広すぎるため、「ハッ」と感動し「ホッ」とやすらぐ、楽しくて安全で清潔な、疲れないまちをめざしたものです。しかしまちは生きものです。まちをつくることはまちを育てることだと計画段階から考えておりました。

これからのまちづくりについて

これからのまちづくりとしては、「人間主役のまち」「アメニティ」「アイデンティティー」といったことがポイントとなると考えてます。「人間主役のまち」とは個人の顔がみえることを前提としたまちづくり、都市計画です。「アメニティ」は「いかに楽しく時間がすごせるか」を問うものです。「アイデンティティ」はまちのもっている独自性です。何か１つでも売り物をもったまちは強いと思います。

「つかしん」の最近の動向と今後

２年経過した「つかしん」の客は、当初計画では尼崎・伊丹の比重を60～65％程度とみてましたが、実際は２市で50％、その他50％ぐらいでした。これは千里ニュータウン周辺の客が予想外に多かったことによります。客の滞留時間は２時間半程度と予想してきましたが、３時間以上の客が60名を占めています。（通常の百貨店では１時間半程度）売り上げ等もほぼ予想通りで、そういう意味では当初考えたコンセプトが生かされていると考えています。

「つかしん」は周辺のまちに自己主張をすることを特に考慮しています。そのためライブイベントをいつもやっている状況をつくっています。幸い近くに大学が多いので最近ではいろんな企画が進められ、今日もスケートボードをやっています（写真）。本日この会場になっているチャーチスクウエアも、「ハレの場」としてつくったもので、日曜日に人がよくあつまり記念撮映などがされています。

今後の「つかしん」については、まちをつくるという観点から「男の店」の要素がいるだろうと思っています。もともと計画時から「盛り場」をつくりたかったのですが、今後10年ぐらいの間に、そうしたアミューズメント、ホテル、などを考えていく予定です。

講師をお願いした矢野先生にはお忙しい中誠にありがとうございました。参加された方々からも活発な質問があり、盛況のうちに終えたことを紙面をかりてお礼申し上げます。

（編アルパックセミナー事務局）

チャーチスクウエア前でのスケートボード

旧刊新刊書評

「岐路に立つ都市再開発」―弁護士からの実践的プロポーザル―

大阪弁護士会都市問題研究会著　都市文化社刊

斎藤　侑男

「岐路に立つ都市再開発」―弁護士からの実践的プロポザール」

この書は、大阪駅前と大阪阿倍野の２つの「問題」を抱えた再開発に関わった弁護士が、その問題解決に向けて思い悩んだ結論を、あるべき都市再開発の方向として提言したものである。その提言は、都市の再開発をどのようにしたら積極的に進めることができるかという観点から行われている。

再開発事業の現場で、地元の関係権利者の立場を擁護するために活躍している、そうした役割を担っている人達が、再開発事業の必要性とその推進のための実践的処方箋を書くまでには、大きな飛躍が不可欠であった。著者３人の議論も、ときには深夜にまで及んだという。

この書の中には、こうした飛躍を招来したエネルギーの昂まりをいくつも見出すことができる。それは、まず第一に再開発の現場に対する深い関わりと問題解決に向けての真剣な対応であり、それがすべての出発点であった。次いでは、この問題解決は創造的な都市づくりの仕事であり、そうした「ロマン」に切り込んでいける若手弁護士の活動領域であるという自負と気負いが議論を前進させたということができるだろう。そして、弁護士の立場から、まず各種の法制度や法的規則等の側面からのアプローチが第一であるとして、自らのテリトリーからの全面展開を図っているのである。都市再開発法の仕組み、構造から始まって、要綱・通達による都市再開発事業の内容・問題点、土地信託方式の可能性にまで検討の対象は拡げられていく。

最終結論として、このプロポーザルの前提には、都市再開発の目的の確認と再開発手法の多様性の確認の必要性が強調されており、「誰のための再開発か」という視点の重要性の指摘とあいまって、著者の「ロマン」の依りどころになっているといっても良いだろう。

なお、著者の意識している都市再開発事業は公共施設の整備を伴う、いわゆる都市局所管事業を主としていると思われるが、「住宅局」事業をイメージしていく場合には実践的対応の幅はさらに、拡がっていくと想像される。　（さいとういくお）

カヌーに凝ってます

小泉　春洋

カヌーも最近は週刊誌等に紹介されるようになり、広く普及する兆をみせている。カヌーをするタイプには2つあり、1つはカヌーを自然に親しむ手段として利用しようとするタイプで、ファミリーでゆるやかな川を下り河原でキャンプを楽しんでいる。もう一つのタイプは、カヌーそのものをスポーツとして楽しむ人々で、若い人達を中心とした競技スポーツと激流下りがある。最近、マスコミ等の話題にのぼってくるカヌーのほとんどは前者のタイプのもので、それにひかれてカヌーをやりはじめる人も多い。一方、後者のタイプは毎年若干の新陣代謝はあるもののカヌー人口は横ばいである。

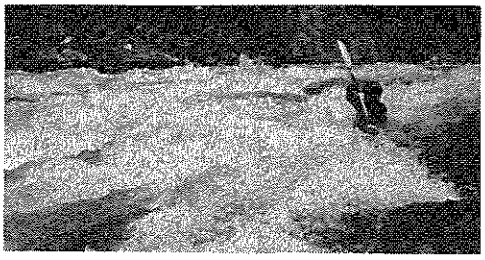
さて、私のカヌーは後者のタイプであり、身近なゲレンデの保津川（馬堀～嵐山）、木津川（伊賀上野～笠置）、瀬田川（南郷洗堰～鹿跳橋）などへクラブの仲間と行っている。しかし、これらの川はどちらかというと中級程度の川であり自分のカヌー技術の向上とともに、より激流をめざして川を求めるようになる。

今年も多くの川へ行ったが、その中でも、日本のグランドキャニオンと言われる四国吉野川（大歩危、小歩危）、黒部川の源流である「上の廊下」、大洪水の中の保津川は印象に強く残る川である。四国吉野川は水流の強いパワーあふれる川、「上の廊下」はヘリコプターで薬師沢まで飛び、標高差500 mの滝の連続したスリルあふれる川、保津川は上流ダムの放流により、嵐山一帯が侵り、事故一歩手前の状態となるような恐怖の川であった。

今はシーズンオフ、仲間が集まれば来年どこの川に行こうかという話でもちきりだが、身近な川で要求を満してくれるような川も少なくなり、新しい川を求めて、東北、北海道さらには、外国へと話が広がっている。

（こいずみはるみ）

カヌー競技



旧況ですが、水需要調査15年目の問合せ

糸乗　貞喜

近況というにはあまりにも古い話ですが、昨年の夏頃だったか春頃だったか、15年前のリポートの内容についての問合せをうけた。たまたま事務所にいて、何の気なしに受話器をとったところ「ずっと前のことなんですが、おたくに水需要について調査してもらったでしょう。その中味のことわかりますか」といった電話がかかって来た。その調査は昭和47年夏に行なったもので、実際の工業団地をまわって実態調査をしたりデータ解析した上で、節水システムも考慮して使用水量の設定をしたものであった。あいにく当時の担当者は退職してしまっているし、結局私が応待した。何とか答えて納得していただいたが、今のところこれが最も古い問い合わせ記録だと思う。

（いとのりさだよし）

やはり古墳は空から見るものだ

山口　繁雄

昨年、実は同じような想いの私共の事務所の者が、セスナで古墳を見ようではないかということで、「巨大古墳群を空から見る会」を企画したことがあります。今回古市古墳群のある羽曳野市の方で、「空から見る会」を

企画されたとの話を聞き込み、万難を排してセスナに乗りに行きました。

興味がおわりの方がいらっしゃいましたら、八尾空航内の第一航空に申し込むといつでも飛んでくれるそうです。ただし、セスナは3人単位で、20分で1人6,000円です。ムダなことにお金を使うよりははるかに素晴らしい空中体験ができると思いますので、興味がおありの方は、是非一度御試し下さい。

（やまぐちしげお）

自慢のみやげもの・うまいもの通信①

湯原独楽は実演販売で

藤田　武彦

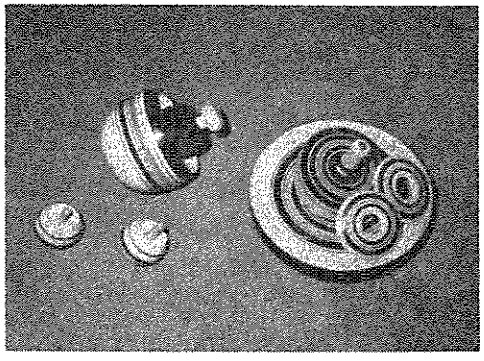
今回から出張先などでみつけたみやげ物などの紹介をはじめます。

第1回は、岡山県の湯原町の「独楽（コマ）」を取上げます。湯原町は「ダムといで湯の里」として有名ですが、一方木地師の里でもあります。木地師はおわんなどの什器を作っていることが多いのですが、湯原は古くから独楽づくりがつづいています。といっても現在は5人程度で、温泉街の一角で製造販売しています。何の変哲もないような独楽も多くの種類があり、全国のものが町内の「独楽博物館」で見ることができます。湯原町で私が気に入ったのは写真にあるものです。左側のものは「逆さ独楽」といってまわっている際中に上下逆転してまわります。右側のものは「追いかけ独楽」で円盤2つをコマの上におくと追いかけっこを演じます。家にもってかえって子どもに見せると何回もやるよう求められて大変でした。実演販売しているところで講釈をききながら、出来たものを求めることもできます。お近くにおいでの時にはお求め下さい。

（ふじたたけひこ）

独楽の実演販売

湯　原　独　楽



ネットワーク通信①

“ため池の会”

― ソフトなブレーン・ストーミングの集まり ―

重本　幸彦

〔会の顔ぶれ〕

毎月第3木曜日の晩になると、大阪・天満橋の地域計画・建築研究所大阪事務所の会議室へ、“にこやかな”顔のサラリーマン（時々は女性会員も）などが、1つずつ土産話を持ってやって来る。

メンバーの職業は、銀行の調査部スタッフ、百貨店のマネジャー、証券マン、通産局や府庁などのお役人、大手民間企業の企画部・調査部系の人、コンサルタント、あるいはプロパンガス販売や自動車メーカーの人たち、中には脱サラで「独立準備中」という人までいる。要するに、この会が面白いと思っている人なら、誰でもよくて、年代は、20代から60

歳ぐらいまで。商店街の人ほどニコニコしていないが、平均的なサラリーマン、中年男性からみると、“にこやかで柔らかい面々”である。

〔会のテーマ〕

6時半になると、会合が始まる。

まず、メンバーが順に、自己紹介を兼ねて土産話を一言づつする。仕事のこと／趣味のこと／おいしい食べもの話……自分の体験を踏まえて、キラリと光る情報を参加者に提供する。

やがて、その日の講師が話を開始する。会員が講師のこともあり、会員以外の講師をお願いする日もある。

「脳力開発とアルファ波の話」「国際金融都市大阪の可能性」「新空港と泉州地域周辺整備」「気象予報40年」「株式談義」「中国研修生の見た最新日本事情」「生活と音」「リゾートの今までとこれから」「博覧会の舞台裏」など様々だ。時には「“吉兆”で季節料理を楽しむ会」などもあり、番外で文楽の鑑賞会などもやる。

講師の話が終わるとコーヒーを飲みながら、自由討議に入る。メンバーから質問や意見が次々と飛び出す。

会員も一応はその道のベテランだし、会員外講師もメンバーのコネで頼んでくるその道の一流の人である。したがって、ディスカッションは、たちまち遠慮のない本質（本音）論になり、その意味で関西流なのかもしれない。なごやかな中にも真剣勝負のブレーン・ストーミングである。

やがて、午後9時頃になると、集めた会費の中から、コーヒー代を差し引き、いくばくかを講師に交通費（会員外の場合）をお渡ししてお開きとなる。

〔会のプロフィール〕

○発足＝昭和59年9月。この1月で35回目。

○入会＝会員の推せん（紹介）、現在の会員数約50人。

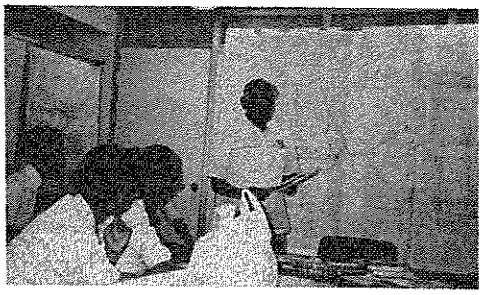
○「ため池の会」の名前の由来＝長くなるので省略。要するに、はっきりしている訳ではなく、会員も気にはなるが、どうでもいいと思っている。

○事務局＝地域計画・建築研究所大阪事務所（重本、糸乗、藤井、藤田）

（しげもとさちひこ）

ため池の会の風景（62年6月）

（この日のテーマは「河内の王陵群と日本の古代数学」）



編集後記

ニュースレターも新しい年を迎えることができました。今号から「ネットワーク通信」、「自慢のみやげもの・うまいもの通信」の連載を始めました。同時に、編集部では、読者の方々の名簿整理の作業もすすめておりますが、その関係で、今回名簿整理のためのハガキを同封させて頂きました。宛先などの変更がございましたら、お手数ですが、お知らせいただければ幸いです。また、「感想」の欄も設けてありますので、ニュースレターに関して、忌憚のない御意見をお願いしたいと思います。

（い）

まちかど

カラフルタウン“キャンス”

馬場　正哲

滋賀県長浜市の中心市街地から２キロ、国路８号バイパス沿いに白亜の商空間が出現し、賑わっています。

敷地３千坪に集客力のあるファーストフードの「王将」、書店の「ザ・ブック」を中心にスポーツ用品店、レストラン、ブティック、理・美容店、子供洋品店などと、スイミングスクール、エアロビクスのスポーツセンターを揃え200台の駐車場を備えています。

ミニＦＭ局ボックスを中心に、板張りの回廊と水の演出によって全体をまとめ、点から面の広がりと奥行きをつくり出し、一つの“まち”の出現です。

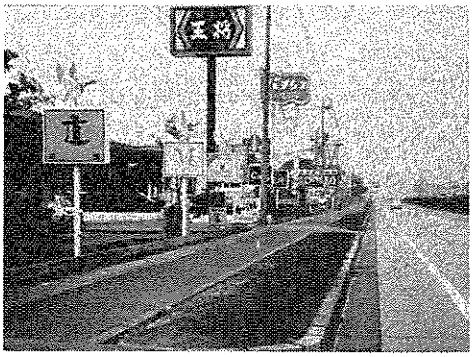
ターゲットは、ヤングとニューファミリーで、オープンしての実感は湖北の田舎にこんなに若者がいたのか。特に女性が多いのに驚ろいたとのこと。昨年夏にプールバーを持った飲食棟がオープンし、今後も拡張をつづけます。

沿道立地の商業施設も、便利さだけでなくコンセプトを持った、複合型「カタマリ」の時代になりつつあるようです。

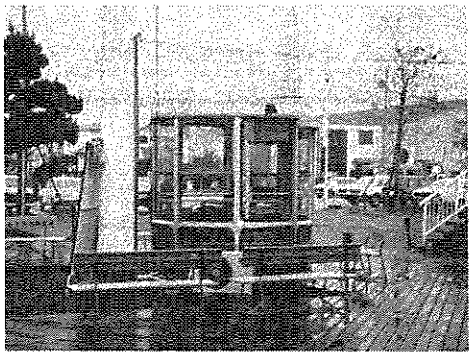
ちなみに、本年隣地に西友ＳＣ（第２つかしん）がオープン予定です。

（ばばまさあき）

国道８号に面して



「THK・BOOK」も集客の核、中央にミニFM局



１階のプールバーが今流行です

ARPA・K　㈱地域計画・建築研究所

ARCHITECTS, REGIONAL PLANNERS & ASSOCIATES, KYOTO

本社 京都事務所	〒600	京都市下京区四条通り高倉西入ル立売西町82 （大和銀行京都ビル８階）	TEL (075) ２２１－５１３２㈹
大阪事務所	〒540	大阪市東区石町１丁目１番地 （天満橋千代田ビル２号館）	TEL (06) ９４２－５７３２㈹
名古屋事務所	〒460	名古屋市中区丸の内３丁目18番30号 （ツボウチビル６階）	TEL (052) ９６２－１２２４
九州地域計画研究所	〒810	福岡市中央区天神1丁目15番1号 日之出ビル6階	TEL (092) ７３１－７６７１